

JAPANESE FOR FOREIGNER

外国人
のための
日本語
例文・問題
シリーズ

5

形容詞

けいようし

■西原鈴子 ■川村よし子 ■杉浦由紀子 著

監修 名柄 迪

ADJECTIVES

*Innovative
Workbooks
In Japanese*

荒竹出版

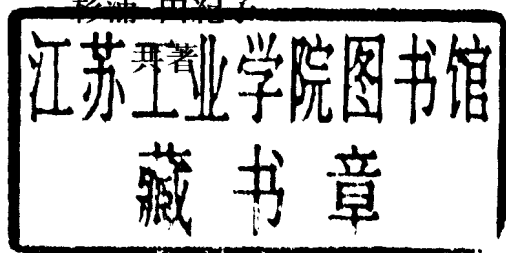
外国人のための日本語 例文・問題シリーズ5

形 容 詞

西 原 鈴 子

川村 よし子

杉浦 由紀子



荒 竹 出 版

著者紹介

西原鈴子（にしはら・すずこ）

1963年国際基督教大学教養学部語学科卒業。70年ミシガン大学大学院言語学科博士課程修了（Ph.D.）。現在、国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長。論文に、「話者の価値判断——その含意性と異言語間伝達の問題」（『研究報告集』8，国立国語研究所，1987），「談話構造における助詞の機能」（『日本語教育』62，1987）他がある。

川村よし子（かわむら・よしこ）

1973年津田塾大学文学部国際関係学科卒業。81年東京大学大学院比較文化博士課程修了。現在、国際基督教大学日本語講師，津田塾大学フランス語講師。論文に、「学生の誤訳の分析とその指導」（『津田塾大学紀要』17，1985）他がある。

杉浦由紀子（すぎうら・ゆきこ）

1967年青山学院大学文学部英米文学科卒業。現在、国際基督教大学日本語科助手。論文に、「中，上級日本語教育における文脈的制約の取り扱いに関する一考察」（共著，*ICU Language Research Bulletin*, Vol. 1, No. 1, 1986）がある。

外国人のための日本語例文・問題シリーズ5

形 容 詞

昭和六十三年四月五日
平成 六年六月六日
三 初 版
刷

著 者

発行者

印刷／製本

発行所

荒竹出版株式会社

東京都千代田区神田神保町二一三四

郵便番号一〇一

電話 〇三三二六二〇二〇二

振替（東京）二一六七一八七

（乱丁・落丁本はお取替いたします）

ISBN4-87043-205-6 C3081

西原鈴子
川村よし子
杉浦由紀子
荒竹 勉
中央精版印刷

監修者の言葉

このシリーズは、日本国内はもとより、欧米、アジア、オーストラリアなどで、長年、日本語教育にたずさわってきた教師三十七名が、言語理論をどのようにに教育の現場に活かすかという観点から、アイデアを持ち寄ってできたものです。私達は、日本語を教えている現職の先生方に使っていただくだけでなく、同時に、中・上級レベルの学生の復習用にも使えるものを作るように努力しました。

このシリーズの主な目的は、「例文・問題シリーズ」という副題からも明らかのように、学生には、今まで習得した日本語の総復習と自己診断のためのお手本を、教師の方々には、教室で即戦力となる例文と問題を提供することにあります。既存の言語理論および日本語文法に関する諸学者の識見を無視せず、むしろ、それを現場へ応用するという姿勢を忘れなかったという点で、ある意味で、これは教則本の実用文法シリーズと言えるかと思います。

従来、文部省で認められてきた十品詞論は、古典文法論ではともかく、現代日本語の分析には不十分であることは、日本語教師なら、だれでも知っています。そこで、このシリーズでは、品詞を自立語では、動詞、イ形容詞、ナ形容詞、名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、コ・ソ・ア・ド指示詞の九品詞、付属語では、接頭辞、接尾辞、(ダ・デス、マス指示詞を含む)助動詞、形式名詞、助詞、助数詞の六品詞の、全部で十五に分類しました。さらに細かい各品詞の意味論的・統語論的な分類については、各巻の執筆者の判断にまかせました。

また、活用形の形についても、未然・連用・終止・連体・仮定・命令の六形でなく、動詞、形容詞ともに、十一形の体系を採用しました。そのため、動詞は活用形によって、u動詞、ru動詞、行く動詞、来る動詞、する動詞、の五種類に分けられることになります。活用形への考慮が必要な巻では、巻頭に活用の形式を詳述してあります。

シリーズ全体にわたって、例文に使う漢字は常用漢字の範囲内にとどめるよう努めました。項目によっては、適宜、外国語で説明を加えた場合もありますが、説明はできるだけ日本語でするように心がけました。

教室で使っていたく際の便宜を考えて、解答は別冊にしました。また、この種の文法シリーズでは、各巻とも内容に重複は避けられない問題ですから、読者の便宜を考慮し、別巻として総索引を加えました。

私達の職歴は、青山学院、獨協、学習院、恵泉女学園、上智、慶應、ICU、名古屋、南山、早稲田、国立国語研究所、国際学友会日本語学校、日米会話学院、アイオワ大、朝日カルチャーセンター、アリゾナ大、イリノイ大、メリーランド大、シガン大、ミドルベリー大、ペンシルベニア大、スタンフォード大、ワシントン大、ウィスコンシン大、アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター、オーストラリア国立大、と多様ですが、日本語教師としての連帯感と、日本語を勉強する諸外国の学生の役に立ちたいという使命感から、このプロジェクトを通じて協力してきました。

国内だけでなく、海外在住の著者の方々とも連絡をとる必要から、名柄が「まとめ役」をいたしました。が、たわむれに、私達全員の「外国語としての日本語」歴を合計したところ、580年以上にも及びました。この600年近くの経験が、このシリーズを使っていたく皆様に、いたずらな「馬齢

の積み重ね」に感じられないだけの業績になっていればというのが、私達一同の願いです。

このシリーズをお使いただいて、*Two heads are better than one.*（三人寄れば文殊の知恵）とお感じになるか、それとも、*Too many cooks spoil the broth.*（船頭多くして船山に登る）とお感じになったか、率直な御意見をお聞かせいただければと願っています。

この出版を通じて、荒竹三郎先生並びに、荒竹出版編集部の松原正明氏に大変お世話になりましたことを、特筆して感謝したいと思います。

一九八七年 秋

ミシガン大学 名誉教授
上智大学 比較文化学部教授

名 柄 迪

はし が き

本書は、「形容詞」を「単独で述部を形成できる判断詞」と解釈し、学校文法で「形容動詞」とされて来たものをもその範疇はんちゆうに含めてゐる。活用の違いから「イ形容詞」、「ナ形容詞」を区別してはいるが、双方そうほうが統語的・意味的特徴を多く共有していることは、本文からも納得なつとくしていただけることと確信する。それらの特徴を重視するゆえに、もう一つの可能な分類である、「形容動詞を名詞とみなす」とする解釈を採らなかつた。

ただし、品詞分類はそれ自体便宜べんぎ的なものであり、線引きが困難な部分は当然存在する。どこまでを品詞の範疇はんちゆうとするかよりも、どこが言語的に面白いのか、どこが習得しにくいだろうかといった観点から例文・問題を作成した。

紙面の制約から、そして著者達の力不足から、扱い残した点も多くあることを痛感しつつ、日本語教育の現場で少しでもお役に立つことを念願している。

一九八八年三月

西原 鈴子

川村 よし子

杉浦 由紀子

本書の使い方

先生方へ

日本語の形容詞、形式形容詞は、他の言語に比べて際立った特色をいくつか持っています。述語として一人前であること、活用形を持つこと、感情形容詞のように感情主の制約があること、等はその代表的なものです。不特定多数の言語との比較を試みることは本書の目的ではありませんし、それと明記してはありますが、教育の現場で使用する際に学生の母語との比較で意味のあるところを選んでお使い下さい。前半は文法的な整理を目的にして書きました。

後半はやはり不特定多数の言語との意味のカテゴリー的ひろがりの比較に役に立つようにと願って種々の形容詞の意味素性を羅列しました。ごくあたりまえの語の持つ意味の範囲が、外国語と比べて時には驚くほど異なっていることは御承知の通りです。本書が学習上の不必要な誤解を防ぐための一助となれば幸いです。

学習者の皆様へ

例文を参考にして、練習問題を何度もやって下さい。その上でまだ疑問があったら先生方の助けを求めたらよいと思います。この本に出て来る形容詞がすべて使いこなせたら、あなたの日本語は完成まぢかです。

目次

本書の使い方
xiii

第一章	形容詞が表すもの	1
-----	----------	---

第二章	形容詞の役割	3
-----	--------	---

(一)	単独で述語となる	3
(二)	用言（動詞や形容詞）を修飾する	5
(三)	名詞を修飾する	8

第三章	形容詞の活用	9
-----	--------	---

(一)	イ形容詞とナ形容詞	9
(二)	形容詞の活用	12

第四章	形容詞の役割と活用形	15
-----	------------	----

(一)	述語になる	15
(二)	用言（動詞・動詞句あるいは形容詞）にかかる	17
(三)	体言（名詞および名詞句）を修飾する	21

〔四〕	名詞的用法	23
〔五〕	形式形容詞に続く形	26

第五章	形容詞のテンスとアスペクト	31
------------	----------------------	----

〔一〕	形容詞の過去形はいつ用いるか	31
〔二〕	状態の変化を表すには	33

第六章	感情形容詞	37
------------	--------------	----

〔一〕	感情形容詞の特徴	37
〔二〕	「―がる」の用法に関する制限と注意すべき点	42

第七章	形容詞とヴォイス（態）	47
------------	--------------------	----

〔一〕	願望の「たい」	47
〔二〕	「欲しい」	50
〔三〕	「―ない」を含む形容詞	52
〔四〕	「―なくて」と「―ないで」	54

第八章	文のムードを表す形容詞	59
------------	--------------------	----

〔一〕	「らしい」	59
〔二〕	「らしい」	62

「ようた」	63
「みたいだ」	64
「そうだ」	65
「かもしれない」	68
「にちがいない」	69

第九章 形容詞と格関係

格助詞「が」を伴う表現	73
格助詞「を」を伴う表現	76
係助詞「は」と格助詞「が」を伴う表現	76
格助詞「が」(あるいは「は」と格助詞「に」を伴う表現	78
格助詞「に」と格助詞「が」を伴う表現	79
格助詞「と」を伴う表現	80

第二十章 形容詞による待遇表現

待遇の体系	85
尊敬表現	85
丁寧表現	86
あいさつ表現	87

第二章 形容詞の意味(1)——類義語

91

(一)	空間的量の大小を表す形容詞	91
(二)	その他の数量を表す形容詞	103
(三)	速度を表す形容詞	106
(四)	新旧を表す形容詞	109
(五)	強弱を表す形容詞	111
(六)	難易を表す形容詞	114
(七)	美醜 ひしう を表す形容詞	118
(八)	色を表す形容詞	122
(九)	味を表す形容詞	124
(一〇)	においを表す形容詞	127
(一一)	音を表す形容詞	129
(一二)	温度を表す形容詞	132

第二章 形容詞の意味(2)——多義語

135

付録(1)	慣用表現	151
付録(2)	派生形式	156

第一章 形容詞が表すもの

形容詞は物やことからの性質、状態などを表すとともに、話し手の主観的判断、感情などを表す。

1 物の形や状態を表す

- (1) 青い空、白い雲。(青い、白い)
- (2) 去年ちようどよかった服が今年は小さくなった。(よい、小さい)
- (3) ダイヤモンドはガラスよりかたい。(固い)
- (4) 静かな公園。(静かな)
- (5) この時計は正確です。(正確な)

2 話し手の判断を表す

- (1) 今日は暑いですね。(暑い)
- (2) このジュースはおいしくない。(おいしい)
- (3) 昨日のパーティーはとってもおもしろかった。(おもしろい)
- (4) あの子は親切です。(親切な)
- (5) きれいな花が咲さいている。(きれいな)

3

話し手の感情を表す

- (1) あなたに会えないので、さびしい。(さびしい)
- (2) プレゼントをもらっても、あまりうれしくなかった。(うれしい)
- (3) 足がひどく痛かった。(痛い)
- (4) 私は犬がきらいだ。(きらいな)
- (5) 皆で騒いだらとても愉快だった。(愉快な)

4

願望

- (1) コンサートの切符が二枚欲しい。(欲しい)
- (2) 子供がファミコンを欲しがる。(欲しい)
- (3) スキーに行きたい。(ーたい)

【注】「ーたい」は助動詞。(第七章「参照」)

5

否定

- (1) おかしい。ここに置いておいた荷物がない。(ない)
- (2) そんな事をしてはよくない。(形容詞＋ない)

【注】動詞を否定するときの「ない」は否定の助動詞。

第二章 形容詞の役割

形容詞は後に続く名詞または名詞句を修飾しゅうしきするほかに、単独で述語となったり、連用修飾れんようしゅうしきをしたりすることができる。この点は、英語・フランス語等のいわゆる adjective とは大きく異なっていて、verb や adverb に近い性質も持っていると言うことができる。この章では簡単に形容詞の役割を概観がいかんすることにした。 (詳しくは第四章参照)

〔一〕 単独で述語となる

- (1) バイクの音がうるさい。(うるさい)
- (2) この本は面白い。(おもしろい)
- (3) ワープロは簡単です。(簡単な)
- (4) 彼かれのおくさんは料理が上手だ。(上手じょうずな)

形容詞は動詞と同じように単独で述語となることができる。では、形容詞と動詞との違いはどこにあるのだろうか。次の文を比べてみよう。

- (1) 家の庭に花が咲く。
- (2) 家の庭の花が美しい。

どちらも「花」について述べているという点は共通しているが、(1)の文の「咲く」が「花がどうなる」という変化、作用を客観的に表現しているのに対して、(2)の文の「美しい」は、主観を通してとらえられた「花」の状態を表現している。この「咲く」が動詞、「美しい」が形容詞である。

もっとも、動詞も状態を表すことがある。例えば「咲いている」の「ーている」の形は、動作（あるいは作用）が現在も進行している状態にあることを表し、「咲いた」の「ーた」は動作や作用が過去において行なわれた状態にあることを表している。また、この二つの形にしか活用せず、「状態動詞」とよばれている動詞もある（例 そびえる、すぐれる）。ただ、いずれの場合も、動詞そのものは、動作や作用について述べているのである。

形の上での主な違いは次のとおりである。

- 1 活用の違い
- 2 形容詞は丁寧体で「ます」を用いない
- 3 形容詞の連用形には連用修飾の用法がある
- 4 形容詞には命令形がない

練習問題 [一]

形容詞があれば、その部分に線をひきなさい。

- 1 おいしそうなごちそうが並んでいる。
- 2 天気がよかったので、散歩にでかけた。
- 3 たくさん歩いたので、とても疲れた。

- 4 おなががすいたし、のども渴かわいている。
5 フランス映画がすきだ。

(二) 用言（動詞や形容詞）を修飾しゅうしよくする

形容詞は、副詞と同じように動詞・形容詞あるいは動詞句を修飾しゅうしよくすることができ、その動作・作用あるいは状態がどのように起きているのかを示している。

【注】

動詞にも連用形があるが、これは後の動詞を修飾しゅうしよくするというより、同時あるいは継起けいき的に二つの動作が行なわれることを示しているにすぎない。

1 動詞を修飾しゅうしよく

- (1) 美しく咲く。(美しい)
(2) 強く、正しく生きる。(強い、正しい)
(3) 選手は足音も高く、入場した。(高い)

2 形容詞を修飾しゅうしよく

- (1) この洗剤せんざいを使うと、靴下くつしたがすごくきれいになる。(すごい、きれいな)
(2) 雨がひどく激はげしく降り出した。(ひどい、激しい)

3 動詞句を修飾しゅうしよく

- (1) さびしく一人で家にいた。(さびしい)
(2) 黒板に大きく丸を書いた。(大きい)